

## Special Essay

## 退任記念誌に想う

医学部長 野口 正人

医学研究科長に就いてから急にエッセイなどの執筆依頼が増えた。テーマが決められていて、それが得意分野でない場合などは、数日間呻吟する。一方、日頃自分が考えていることを自由に書ける場合には、2、3時間で一気に仕上がる。そのような雑誌が「医事新報」の「炉辺閑話(1月)」と「緑陰随想(8月)」である。平成20年から依頼されており、毎回は書けないが、それでもこれまで4、5編が掲載されている。商業誌ではないが、私が好んで書くのは退任教授の退任記念誌への寄稿である。教授会という同じ釜の飯を食った間柄であるから、その人となりをよく知っているし、同僚意識もあるから気楽に書ける。その人柄を表す的確な語を考えるのも楽しい。

東教授の退任記念誌には、「恵恤の人」と題して、次のような内容を書いた。「先生はすぐれた脳生理学者であり、もとより生理学一般に玄通している。一方、東教授は類い希なる教育者でもある。教務委員会に秕疵あれば、その非を質すことに躊躇いがなかった。東教授の言辞の明晰さは心地よい。いかなる会議でも、諛言諛辞を弄することなく直截な意見を述べ、しかるに相手を殫尽することがない。生涯において良質の人格に遭遇する機会は多くない。自身が及ばない人格を素直に認めると、不思議とひとがよくみえ、物事もよくみえるようになる。圭角の多い私は、東教授からそれを偷取した。東教授はまさに恵恤の人である。」

加納教授は「曠達の人」と評した。「加納教授と親しくつきあうようになったのは、平成19年度から病院長・研究科長として、教授会で隣席するようになってからである。病院・臨床関係に疎い私は、加納病院長の発言に必死で聴耳をたてるのであるが、理解できないとき、そっと彼の手持ち資料をのぞく。すると僅かに資料を横に滑らせ、瞬時私にほほえむような催顔をむける。加納教授は曠達の人である。」と記した。

芳野教授については、「芳野先生は医化学同門会員であったが、私が平成5年に本学に赴任した時には小児科に在籍されていたので、私と先生の接触の場は医化学同門会などで挨拶を交わす程度の点と点の繋がりしかない淡い交際であった。教授に就任されてからは、教授会等で親しくおつきあいさせて頂いた。先生は、常に温容であり容儀に崩れがなく、寡黙ながらその言志には澄みがある。まさに、衡気の人である。」と結んだ。

